岐」や「津島」はいうに及ばず、「隠岐の島」も同じ音の「沖ノ島」がある。そこで　まず六つの小島を、玄界灘を中心にした周辺の島々と考えて、島の歴史と古い名前とを考え合わせてみた。そうすると、六つの小島が糸島～博多湾～宗像にかけての島々に比定出来る可能性があることに気がついた。

順に並べて、それと思われる島と並べてみる。

吉備児島きびのこじま（建日方別たけひかたわけ）＝相島（あいのしま）

小豆島（大野手比売おおのでひめ）＝玄界島（げんかいじま）

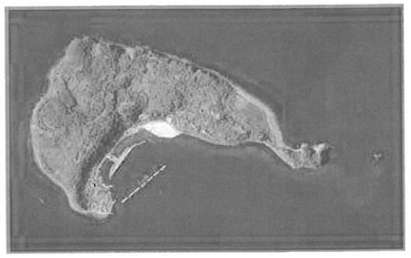
大島（大多麻流別（おおたまるわけ）＝大島（おおしま）

女島ひめじま（天一根あめひとつね）＝姫島（ひめしま）

知詞ちかの島（天之忍男あまのおしお）＝志賀島（しかのしま）

両児ふたごの島（天両屋あまのふたや）＝二見ヶ浦（ふたみがうら）の夫婦岩

吉備児島より天両屋島まであわせて六島である。六島と書いたが、正確には二見ヶ浦は浜辺の岩礁なので、「五島」と「二見が浦が見える糸島半島」と考えるべきである。しかし、「今まで島の話だったのに、岩礁は不釣合ではないか」と思われるであろうが、「両児島」を「二見ヶ浦の夫婦岩」と考えた理由も含め、他の五島やそれ以外にも玄海灘にあると考えることができる島について、なぜそう考えられるのか、これから理由を述べる。


相島（あいのしま）

○それぞれの島名の意味

（一）吉備児島（きびのこしま）亦の名を健日方別（たけひかたわけ）＝相島（あいのしま）

相島は、昔様々な名で呼ばれていたようであるが、その中の一つに「阿閇島（あへのしま）」の呼び名がある（hp「日本の島へ行こう」（福岡県の島）（筑前諸島）相島より）。「阿閇氏」は古代日本の豪族であり、大彦命を祖とする皇別氏族だそうだ。そしてなんと古事記編纂時の天皇が元明天皇であり、又の名を阿閇皇女（あえのみめみこ）（六六一～七二一）というのだ。

阿閇皇女は天智天皇の第四皇女である。自分の息子である文武天皇がわずか二三歳で崩御した後、遺子である七歳の首が即位するまでの中継的な天皇として四七歳にして即位した。注目すべきは草壁皇子との間に軽皇子（文武天皇）・氷高皇女（元正天皇）の他、吉備皇女をもうけているのだ。つまり、阿閇の子は吉備の児といえるのだ。

相島は古代より日本の外交の最先端であり、江戸時代には朝鮮通信使が宿泊するための五百人が収容できる施設もあったとか。古代日本は頻繁に大陸との交易や戦争をしていたのであり、国家プロジェクトとして相島を開発整備していたことがこの名から伺えるのである。

また、吉備児島の亦の名を分析すると以下のようになる。健（たけ）を武（たけ）ととらえ、「日の軍隊（おそらく太陽を崇めた渡来軍団）を分けた片方」と読める。これは、相島が北部九州を制圧するうえで、軍事拠点となったことを示唆しているといえないだろうか。

では、吉備氏とはどんな一族だったのか？吉備氏という一族は古代天皇家に遣えた有力豪族の一つである。「九州百名山」によると、八世紀に糸島の高祖山に怡土城をつくったのは吉備真備（きびのまきび）だそうだ。「吉備氏の系譜には、三種類ありべ（わけ）号の人名表記に古形を残し、王家との関係も姻戚関係のみで王族出身とは記さず、一族内部も対等の関係であった（ウィキペディア「吉備氏」より抜粋）」そうなので、「健日方別」という島の古名と吉備氏の号である「別（わけ）」とは整合性がある。吉備氏はその後、五世紀に繁栄し「吉備を筑紫・出雲・ヤマト・毛野と並ぶ古代の有力地方国家に発展させることに貢献」している。また「ヤマトの豪族たちと同盟し、日本列島の統一と発展に寄与した一族」とウィキペディアで紹介してあるので、渡来勢力が当初からいくつかの氏族による連合軍であった可能性を示唆している。

（二）小豆島（大野手比売おおのでひめ）＝玄界島（げんかいじま）

玄界島は小豆島の名にふさわしい、小豆のような小山からなる島である。平地はほとんどない。この島には小鷹神社があり、百合若伝説が残されている。

百合若伝説をウィキペディアから抜粋する。

『都の天子の前で、資産を誇るが子のいない万の長者と、子宝には恵まれているが格別の金持ちでもない朝日の長者が支持比べをして、万の長者は人々の共感を得られず敗北した。負けた万の長者は清水の観音堂に昼夜熱心に祈願し、授けられたのが後に百合若大臣と呼ばれる男児であった。百合若は弓に長けた勇武の若者となり、その名は近隣にも響くようになる。やがて春日姫という美しい嫁を迎え睦まじく暮らすが、地方の国司に任じられる。　百合若は、日本へ押し寄せてきたムグリ（蒙古）の大軍討伐を命じられる（海の向こう（ケイマン国と呼ばれる）で反乱を起こした鬼を征伐するとも）。ムグリを追い払った百合若は、大陸へ渡り、高麗でムグリの大軍を打ち破る。ムグリとの戦闘は、百合若の勝利に終わる。

戦いに勝った後、信頼している別府太郎ら部下に裏切られ島に置いて行かれる百合若。別府太郎らは帰国後、天子に百合若は病没したという虚偽の報告をして国司の栄誉を得た。

夫を失った姫に太郎は求婚を迫るが百合若の死を信じられぬ姫は手紙を書き、硯や筆・墨を入れた袋を鷹の緑丸の脚に結びつけて空に放した。

玄海島（げんかいじま）

そのうちの一羽が荷重で瀕死の状態になりながら百合若の元に辿り着き、事を知った百合若は壱岐の船を掴まえ帰還すると正体を隠して太郎のもとに仕える。やがて競射の日が来て、成り行きで得意の弓術を披露するチャンスを得た百合若は自分を裏切った太郎を射抜き復讐を果たす。その後百合若は春日姫と涙の再会を果たし、国司の位も取り戻した。』（ウイキペディア「百合若大臣」より）

百合若大臣の妻が春日姫。玄界島の小鷹神社には伝説の物と称される春日姫の硯も伝わっており、春日姫と玄界島が深い関わりをもっていたことをうかがわせる。春日姫が春日出身とすると、「春日市」と「大野城市」は隣接した街（春日市役所と大野城市役所は直線距離で一kmと離れていない。明治時代はともに筑紫郡春日村、大野村で隣り合わせであった。）であり、春日姫＝大野出姫（おおのでひめ）ともいえるのである。また、春日市・大野市は大宰府に隣接しており、古代より都が置かれた土地である。古代九州王朝がこのあたりに都を構えていた可能性は十分にある。（次回へ）

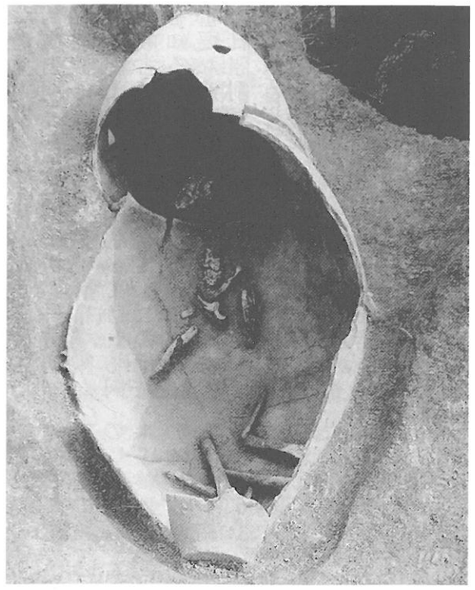
「高尾・阿志岐」領域圏は存在するか

工藤　常泰

今回は太宰府市高雄地区及び筑紫野市阿志岐地区に広がる弥生・古墳時代の遺跡群につい見てみたいと思います。両地区とも宝満川流域遺跡という点では本誌一二四号「小郡地区遺跡を見る」の続編ともいえるものです。

地形的にいえば高尾地区は太宰府市の南東部に位置し、宝満山よりのびた丘陵部と幾筋かの谷間より成っています。遺跡としては縄文から中世の山城までが認められていますが、現在では急速な宅地化のあおりを受けほとんどが消滅、訪ねて行っても標識もなく場所すら確認できませんでした。

そこで、太宰府市教育委員会発行の「高尾地区遺跡群」から、吉ヶ浦遺跡を中心にこの丘陵の弥生・古墳時代を見てみたいと思います。この遺跡は一次調査（一九七九年）を福岡県教育委員会が、二次調査を太宰府市教育委員会が行っています（一九八二年度）。遺跡の範囲はすでに宅地造成等により未確定ですが、古墳時代後期の遺物として、円墳三基と玉、鉄鏃、革袋形須恵器など、方形住居。弥生期のものとして円形住居、木棺等一八基、甕棺墓七四基、鉄器類、布、むしろ片、イモガイ製貝輪などが記録されています。


太宰府市教育委員会「資料」より

特徴的なこととしては、弥生時代中・後期のものとしての木棺墓、甕棺墓群、人骨（二体）の存在、そして鉄器編年に一石を投じた鉄器類、さらに布があります。

まず、鉄器ですが、直接発掘を担当し「初期製鉄品をめぐる二～三の問題ー福岡県吉ヶ浦遺跡出土鉄器を中心にしてー」（考古学雑誌第六〇巻第一号）を発表されている橋口達也氏（当時・福岡県教育委員会）によると、斧四点、鉇三点、鏃四点とされ、斧は「時期的には中期前葉に属する可能性が最も強い」とされ、しかも「四点全てが鍛造品である」と結論づけられています。また、鉇も中期前葉とされ「初期鉄器の貴重な資料」と特徴付けられています。鏃も鍛造品で「現在のところ鉄族としては最も古い資料である」とされるものなのです。

そして、この橋口論文の大きな特徴はこれからの鉄器が